©Hideki Otsuka

サントリーホールでリサイタルシリーズ

小山実稚恵 142

ピアノと私

今年はサントリーホールの40周年。4月から来年2月までアニヴァーサリーを祝うさまざまなコンサートが行われます。私も〝サントリー・シリーズⅡ〟としてリサイタルシリーズをさせていただくことになりました。昨年までの4回のコンチェルトシリーズのタイトルは「以心伝心」、今回の4回のリサイタルシリーズのタイトルは「未来永劫」です。

ちょうど先々月号で、私の好きな数字「4」のことを書いたばかりですが、このシリーズを始める前、まだシリーズ企画が実現するかどうかわからない段階から、実は、心の中でこの四字熟語のタイトルを決めていました。やりたいと思って企画を練る時は、それが実現しようがしまいが関係なく、ひたすら思いのたけを込める。タイトルやプログラムを考える企画の道中は私にとって楽しい歩み。最高の喜びです。

公演情報

Étoile（エトワール）～ピアノの星 Vol.4
小山実稚恵＆宮田大 デュオ
2月21日（土）14：00　杉並公会堂
宮田大（チェロ）
ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第3番
ラフマニノフ：チェロ・ソナタ
問い合わせ：杉並公会堂
☎03-5347-4450

私は演奏曲目を決めるに当たって、3つのパターンがあると思っています。1つ目は、先方からのリクエストを受けて決める作品。ご縁で出会う作品です。若い頃は、コンチェルトは何より共演させていただけることが嬉しかったので、とにかくリクエストに答えることで自身のレパートリーも増やしていました。2つ目は、弾いたことはないけれど一度は弾いてみたいと思う作品。自からが選ばなければ、一生弾かないままになってしまいそうな作品です。3つ目は、とにかく好きな作品。一生の内に何度でも弾きたい、弾き続けてゆきたいと思う作品です。

今回のリサイタルシリーズで取り上げるのは、この3つ目。好きでたまらない一生弾いていきたい作品です。簡単に言えば、弾くほどに好きになる作品です。時代の変遷の中で築きあげられた作品は未来へと永遠に続いてゆく。作品はどの時代であっても「過去」の集約の上に成り立ち、「今」に光を当てて「未来」への希望と勇気を与えてくれる。「未来永劫」永遠のものであり続けるのです。

リサイタル第1回（6月30日）は、ベートーヴェン最後のピアノソナタ3曲。30、31、32番です。ピアノという楽器を超えた世界観の中の精神の結晶です。未来を見つめて歩み続けたベートーヴェンが、ピアノで天上への扉を開いた、そんなプログラムです。

第2回（10月29日）は、シューベルトの最後のピアノソナタ3曲。19、20、21番です。あまりにも美しすぎるシューベルトのフレーズを弾いていると息が詰まってきます。言葉もないのです。

大げさな言い方をすれば、ベートーヴェンを弾く時には、私の呼吸はあまりの熱量とともに激しくなったり、集中しすぎて呼吸を忘れてしまったり…。それに対してシューベルトの演奏時には、やるせなさ、せつなさ、あまりの美しさに息が詰まって、どうして息を吸えばよいのかわからないような呼吸になっていることでしょう…。

第3回目は27年1月、第4回目は10月を予定しています。

作曲家によってあまりに違う音楽。そうであっても、それが耐えられないほど好きなのです。M

KOYAMA MICHIE　東京藝大卒、同大学院修了。1982年チャイコフスキー国際コンクール第3位。85年ショパン国際ピアノコンクール第4位。「12年間・24回リサイタルシリーズ」（2006～17年）や「ベートーヴェン、そして…」（19～21年）は、その演奏と企画性で高い評価を受けた。2022年より、サントリーホール・シリーズ「Concerto〈以心伝心〉」を開催。来シーズンはソロ・リサイタルのシリーズを予定している。ショパン、チャイコフスキーの二大コンクールなどの審査員も務める。17年度紫綬褒章を受章。仙台での「こどもの夢ひろば」のゼネラル・プロデューサーを務める。